

# 戦後 80 年と歴史教育

## —歴史総合の実践から考える—

山下達也（明治大学）

根本太一郎（土浦日本大学中等教育学校）

高野晃多（佼成学園女子中学高等学校）

### はじめに

2025 年はアジア・太平洋戦争の終結から 80 年にあたる。戦後 80 年という節目は、単に時間的経過の区切りであるばかりではなく、平和、人権、民主主義、国際秩序の形成過程を、現代の学習者が直面する課題と接続して再検討する契機として捉えられよう。2022 年度から本格実施された高等学校の新科目「歴史総合」は、近現代史を主眼に据え、資料に基づく探究、複数の視点からの検討、そして現在の諸課題を歴史的に考察することを重視する。本稿は、こうした理念を実際の授業デザインに落とし込む方法や考え方について具体的な実践例を通して検討することを目的に企画された活動(第 5 分科会)の報告である。

歴史教育の現状、とりわけ「戦争」を扱う授業は、政治的・感情的緊張を孕むがゆえに、ややもすれば、踏み込みが避けられたり、短時間での扱いにとどまりがちである。しかし、「現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付ける」という歴史総合の目標に照らせば、「戦争」はまさにその学びを体現し得る格好のテーマといえよう。国家・地域・個人の視点を往還し、加害／被害、戦前／戦後、国内／国外といった対概念を架橋・相対化することで、短絡的な事実理解にとどまらず、因果関係・相関関係の捉えなおしや価値判断の根拠化、さらには空間・時間軸を横断する越境的把握を含んだ複層的な理解へと到達できる可能性を宿している。むろん、そのためには生徒たちが教科書の叙述に触れるだけでは十分ではない。学習指導要領が明示する、「多面的・多角的な考察や深い理解」の成否は、教員たちによる授業デザインと実践に大きく委ねられているといってもよいだろう。以上の点を踏まえ、以下の本論では 2 名の現職教員による実践について紹介する。

第一に紹介するのは、土浦日本大学中等教育学校教諭の根本太一郎氏による実践である。同氏の報告は、「歴史総合と世界史探究の接続—過去の歴史を自分ごととして捉え、ナラティブに語るができる生徒の育成—」と題して行われた。探求科目との接続を視野に入れた、高校における歴史教育の実践である。学習者が歴史を「自分ごと」として引き受け、根拠に裏付けられた自らの語りを構築できるようになるまでのプロセスが示される。

次に、佼成学園女子中学高等学校教諭の高野晃多氏による実践である。同氏の報告は、「歴史教育はどこまで人間の尊厳を受け止めることができるのか?～黒川開拓団 佐藤ハルエさん・華僑虐殺生存者 鄭来さんの視点から～」と題して行われた。2025 年 7 月に公開された映画「黒川の女たち」でも注目された黒川開拓団の佐藤ハルエさん、華僑虐殺生存者である鄭さんとの出会いや対話を重ねることを通じて育まれたであろう同氏ならではの

の問題意識と教育実践である。史資料に記録された「事実」を超えて、語り手の身体性や感情、ことばをどのように受け止め、教室という空間で共有可能な学びへとつなげるのか、極めて繊細でありながら、歴史教育に固有の倫理的・実践的課題に正面から向き合う試みである。以下、兩名から寄せられた実践に関する報告の内容を掲載する。

## I. 高等学校「歴史総合」「世界史探究」における金融経済教育に関するカリキュラム・マネジメント（根本太一郎）

### 1 本研究の目的と背景

#### (1) 目的

「歴史」を自分ごととして捉え、ナラティブに語るができる生徒の育成に向けた指導の工夫とその事例について、指導上の手立てと授業実践の詳細を報告した上で、今後に向けた課題と展望を報告する。

#### (2) 背景

①歴史的事象をより一層深く理解するためには、歴史的事象を読み解く上での基本的な知識や概念を習得した上で、複数の視点から事象を見つめ、社会構造の多面的・多角的な考察から問題点を見出したり、現代と共通する諸課題の共通点や差異を把握したりするためのカリキュラム・マネジメントが課題である。

②上記を踏まえ、特に世界で起きている国際問題の構造理解や課題解決を目指すために、1つ1つの歴史的事象に対して、他人事や傍観者ではなく、当事者意識を高め、主体性をもって探究する姿勢を育みたい。結果、歴史的事象を捉えるための「解像度」が高まり、「ナラティブ」に歴史を語るができる生徒の育成につながると仮定する。

#### (3) 指導上の手立て（概要）

①実用主義に基づく授業の構成-来歴・教訓・伝達・対話を経て、「ナラティブ」に歴史を捉えることができるカリキュラム・マネジメントの工夫

②OPPシートとICTの活用による単元構想の共有と形成的・総括的・診断的評価の往還

③歴史実践の六層構造に基づく授業構成の工夫

#### (4) 1時間の授業の具体的な流れ

①歴史的事実の把握・歴史的解釈の方法の獲得と批評する。

②歴史的な見方・考え方はたらかせて個別に捉えた歴史を叙述する。

③他者との対話を通し新たな見方や考え方に気づかせ、歴史認識や価値観の再構成を促す。

④OPPシートへの記述を通した本時の授業への形成的評価・総括的評価の実施を行う。

### 2 授業実践報告

#### (1) 概要

① 後期課程4学年生徒（高校1年生）38名：2024年度実施（歴史総合）

国際秩序の変化や大衆化と私たち「アジアの経済成長と移動する人々」

② 後期課程5学年生徒（高校2年生）40名：2025年度実施（世界史探究）

西ヨーロッパ世界の変容「ジャンヌ・ダルクから歴史を考える」

※授業の詳細については、以下に添付のQRコードを参照ください。

## (2) 成果と課題

### 【成果】

生徒たちが既習事項を踏まえて歴史的事象を適切に捉え、当時の世界情勢や国際関係、時代の文脈を捉えた上で、個々の歴史観に応じて記述することができていた。特に、当時を生きる人々への心理的な共感、置かれた境遇への理解、など「心」が揺さぶられた様子も感じられた。生徒によっては自らの生き方と照らし合わせることができた者もいた。

### 【課題】

生徒たちが一人一人固有の歴史を紡ぎ、叙述することができていたか、さらなる分析が必要である。特に、生徒の生活経験や環境要因に起因するナラティブな語りが生まれるような授業の展開や教材の工夫を講じていきたい。一方で、上記のように読み取り、記述することができたのは全体の6割程度である。資料を読み解く上での視点や作業の手順、思考フローなど、生徒が活動を円滑に行うことができる手立てについて、今後も研究を進めていきたい。

## 3 おわりに

今、歴史教育に求められているのは、「固有の特徴を比較し、共通点や差異を読み取り、互いに影響しあっている人々の『営み』を理解し、説明できる力」である。これを実現できるように、一層の指導の充実を図っていきたい。

## 4 資料の詳細



←QRコード参照。授業の流れや指導上の留意点、参考文献等の詳細等があります。

## II. 歴史教育はどこまで人間の尊厳を受け止めることができるのか？～黒川開拓団 佐藤ハルエさん・華僑虐殺生存者 鄭来さんの視点から～(高野晃多)

私の報告では、『歴史学研究』2025年11月号に掲載された拙稿「<記憶>の時代の歴史教育—すべての「赤い／黒い／白い」ものたちを引き受けるために—」をもとに、歴史教育は戦争体験者の尊厳をいかに受け止められるのかという主題について私見を述べた。

今回の報告では、①戦争に関する歴史学習上で生じる生徒の「どっちもどっち」や「仕方がなかった」などの感想・思考とどのように向き合うべきかを考えること、②戦争体験を知った生徒が「今の私たちが平和なのは〇〇さんのおかげ」という類の感想（「おかげ論」）を抱くこととどのように向き合うべきかを考えることの2つを目的とした。

また報告では、原爆投下に対する各国の歴史認識の差異に関する2023年度高校1年歴史総合での実践と、満蒙開拓団の一つである黒川開拓団において、「接待」という名目で団員の女性にソ連兵・現地民へ身体を差し出させた戦時性暴力（以下、「性接待」と称す）に

関する 2024 年度高校 3 年日本史探究での実践を対象にした。そして、これらのもとになった 2021 年度高校 2 年日本史 A での過去の実践と関連づけながら、どのように生徒の学びを見とり、その後の授業を改善していったのかを論じた。

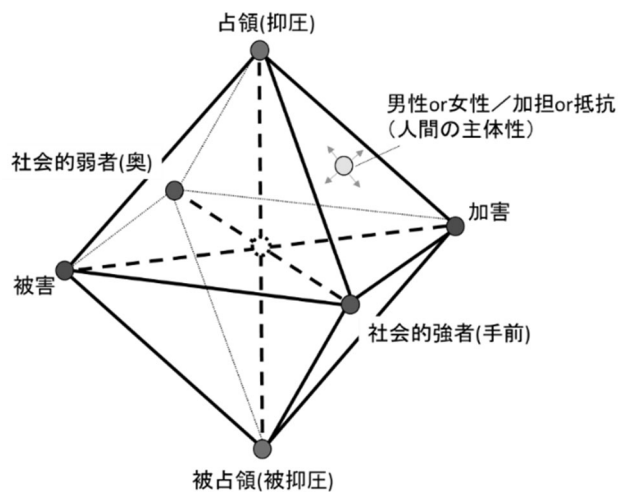
具体的には、①戦争では個人の内面に「被害」者と「加害」者としての両面が併存しえること（＝「被害」と「加害」の重層性）、②そうした「被害」と「加害」は、女性や子どもといった社会的立場が弱い存在に重なりやすいこと（＝「被害」と「加害」の階層性）、③こうした重層性や階層性は植民地主義によって強化・複雑化する側面があることを現代にも通じる戦争の普遍的暴力の構造と位置づけ、実践を積み重ねていった有り様を報告した。詳細は『歴史学研究』掲載の拙稿に譲り、以下ではその概要のみ述べたい。

まず歴史総合実践では、原爆の被害を受けた軍都「広島」の地は、戦後の反核運動のなかでその象徴としての「ヒロシマ」となったが、戦時中マレー半島での華僑虐殺を行った第 5 師団の部隊の中には、広島に本部を置き、広島県内に本籍のある兵士たちが所属する歩兵第 11 連隊がいたことを生徒に示した。そして、広島という街に内包される「被害」と「加害」の重層性を前提に、華僑虐殺生存者の鄭来さんの体験<sup>1</sup>を紹介したうえで、アジアからの視点を踏まえ、「私たちはアジア太平洋戦争における日本の立場を『被害者』として認識するだけでよいのだろうか？」というメイン・クエスチョンを生徒に考えてもらった。その結果と日本史 A 実践での結果、アジアを侵略した日本に原爆が落とされたことを「どっちもどっち」「バチが当たった」「仕打ちをうけた」、原爆は「仕方がなかった」「日本に行った行為は 100%アメリカが悪いと断言してはいけない」と書いた感想や記述が生徒から出てきたことを踏まえて、どのようにその後の授業を展開すべきなのかを論じた。「どっちもどっち」のように並列関係で被害と加害を受け止める感想には、因果関係の視点が欠落しており、それ以外の感想・記述には、大なり小なり因果関係の視点はあるものの、被爆者に対する共感的理解が欠如していると言える。そのため、重要なのは華僑虐殺も原爆投下もともに容認できない戦時国際法違反で、日本の加害のうえに原爆などの被害があることを理解させることだと結論付けた。このように、いかに生徒が因果関係を踏まえつつ善悪の倫理的判断ができるようになるかを考える時、どれだけ生徒が被害者に歴史的エンパシーを働かせて、当事者性をもって理解・思考できるのかが鍵になると私は考える。こうした視点は、戦時性暴力に関する日本史探究実践では、さらに重要になる。

この日本史探究実践は、2025 年 7 月に公開された黒川開拓団に関する映画『黒川の女たち』が制作された際、生徒とともに授業風景の撮影という形で協力するなかで行ったものだ。①なぜ黒川開拓団の「性接待」が起きたのか、②なぜその語りが戦後長らく封じられてきたのか、③今後私たちが「性接待」を語り継ぐためには何が必要なのかを考えることを通して、私たちが今／これからの性暴力被害者とどのように向き合い、その声を聴きとればよいのかを生徒に考えてもらった。特に、黒川開拓団の「被害」の背景には、大陸侵略の尖兵を担わされた「加害」性があることや、ステレオタイプ化された性暴力被害者像が「性接待」を体験した佐藤ハルエさんたちの語りを妨げてきた一因で、現代の性暴力被害者にも同様に当てはめられ声を封じている現状があること<sup>2</sup>、レイプ等の戦時性暴力は単

に性欲による行為ではなく、占領地の敵の男性たちへ敗北を見せつける効果があることなどから起きると言われていること、そして「戦闘を行う兵士には性的充足が必要で、それを満たしてやらないと暴走する」という強固な「男性神話」が固定観念として今に至るまで存在すること<sup>3</sup>などを踏まえて、「性暴力の『史実を刻み続ける』ために私たちに求められていることは何か？」というメイン・クエスチョンを考えてもらった。

こうした実践の上に、私は「戦争／占領」構造の八面体という思考モデルを提唱したい（右下）。この図では、横軸は戦時下における「被害」「加害」という対概念（＝「被害」と「加害」の重層性）を、縦軸は占領／被占領（抑圧／被抑圧）という日常から戦時まで変わらない植民地主義的構造を、奥行きはジェンダー意識による「男性神話」など、日常から戦時にかけて連続して構築されてきた規範に基づき意識される社会的「強者」と「弱者」の関係を、それぞれ表している。そして、動的な点で表すのが人間の主体性だ。戦時と日常の社会構造のなかで、一人一人の人間がどのように行動し、その主体性を発揮したかということを示すため、この点の位置は可変的なものだと定義したい。



今回の報告を踏まえて最後に考えたいのは、この八面体の最奥に位置づけられるのは誰かという問題だ。黒川開拓団の佐藤ハルエさんは、その体験を周囲から「恥」とされたが、本人はそうとは思わず、むしろ「団を守るため」に「お役目だと」思って犠牲になったと、私たちが2022年10月にご自宅を訪れて体験を伺った際にも語っていた。そうしたハルエさんに対して、遺族会の方々が「犠牲になった女性たちのおかげで今の私たちがいる」と感謝を伝える様子が映画でも描かれていた。しかし、こうした感謝は犠牲を強いた団幹部の責任を不問に付し、戦後も語りを抑圧してきた構造を見落とす危険性を孕んでいるのではないか。また、「性接待」について学んだ生徒が書いた感想に「接待をさせられた女性たちがいたから今の私たちがいることを忘れずに生きていこうと思いました」というものがあつた。ハルエさん本人が言う「おかげ」と、遺族が言う「おかげ」と、生徒が言う「おかげ」は質が全く異なることは自明だが、周囲が「おかげ」という言葉で犠牲を包み込むと、他に取得した選択肢への想像力を失わせる恐れがあることは、遺族の言葉でも生徒の言葉でも共通しているのではないか。それに、「性接待」の影響で帰国できずに現地で亡くなった女性たちの思いも背負って体験を語っていたハルエさんが、唯一自分を納得させられる語り口が周囲からの「有り難う」という言葉に応えられるナラティブだったのではないかと考えている。実はハルエさんは、映画を制作した松原文枝さんに一度だけ「性接待」を「怖い」と語ったという。ハルエさんが自身の戦時性暴力体験に関するネガティブ

な感情を松原さんに語ったのは、この一度きりだったが、周囲の「おかげ」という言葉が、癒やしにも、本心を語らせない抑圧装置にもなり得ることを意識すべきだろう。

さらに、これだけの「隠れた／隠されたナラティブの可能性」がある国内の被害者以上に、国外の被害者の語りはより難しいのだと痛感した出来事がある。昨年8月、華僑虐殺生存者の鄭来さんを再び訪ねるため、7年ぶりにマレー半島を訪れた。そこで鄭来さんは「もう80年経っているから、今私が何を言ってももう役に立たないと思う。…私のような一般人は何を話しても聴いてくれる人がいないだろう。…」と語り、証言のあとには体験を思い出して涙を流した<sup>4</sup>。前述のような「隠れた／隠されたナラティブの可能性」はあるものの、黒川開拓団の「性接待」は共同体の記憶として史実に刻まれ、結果的に被害者の尊厳を回復することができた。しかし、その一方で、鄭来さんのように自分の声が共同体の記憶として受け止められずに諦念を抱いたまま亡くなった被害者が、国内外にどれだけいたのかについても想起しなければならない。戦争体験者の証言を受け止めて尊厳を回復すること自体に「国籍・国境の壁」があったのだと再認識させられた経験だった。

この戦後80年の間に、自分の尊厳を蔑ろにされた挙句、八面体の最奥に眠るどれだけの声が口を開くことなく消えていったのかを考えると、鄭来さんが今回見せた涙と、ハルエさんが力強く語り続けた姿は、その対照的な姿をもって私の胸に深く刻まれるものになった。声を聴き取って戦争体験を史実に刻むこと、すなわち周囲の人間・社会がその声・体験を受け止めることが、人間の尊厳を受け止めることにつながるのならば、そうしたものを受け止められる社会の形成者たる主権者を育てるのが歴史教育であるはずだ。このことを肝に銘じて、2人の声に応え続ける授業を積み重ねていきたい。

## おわりに

2名の実践に触れ、歴史教育が過去を知る・学ぶという活動に加えて、今を生きる我々が過去をどう受け止め、どう語るかという学びにもその射程を広げ、新たな展開の可能性が感じられた。そうした新たな歴史教育の展開を支えるひとつとして、「歴史総合」という新たな科目が位置づくならば、本稿で紹介した2名の実践が示唆するところは大きい。

なお、明治大学教育会研究大会における第5分科会当日には、約30名の参加者が集まり、質疑応答・全体議論の時間には、旧植民地や占領地などからの引揚者に関わる情報の提供やそうした人々の生に関わる実践の可能性、日本史、世界史のどちらかに偏る実践への懸念、政治的状況を踏まえた実践の意義等についての議論が行われ、盛会のうちに終了したことを記録として記しておきたい。

<sup>1</sup> 高嶋伸欣ほか『旅行ガイドにないアジアを歩く 増補改訂版 マレーシア』（梨の木舎、2018年）116～117頁。

<sup>2</sup> 山本めゆ「阻まれた声を通して性暴力を再考する－黒川遺族会の実践から」金富子・小野沢あかね編『性暴力被害を聴く－「慰安婦」から現代の性搾取へ』（岩波書店、2020年）220～222頁。

<sup>3</sup> 平井和子『占領下の女性たち 日本と満洲の性暴力・性売買・「親密な交際」』（岩波書店、2023年）293～296頁。

<sup>4</sup> その時の実際の映像は、マレー半島ツアーに同行したTBSのHPから視聴可能である（最終アクセス2026年1月9日）。  
<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/2181248?display=1>